

なった。多くの幼い子供が亡くなるなど、その惨状は想像を絶するものであった。

大連での一年余りの難民生活中も村長さんを中心に弥栄一家は相互扶助し、やっと祖国日本に帰ることができた。しかし、滋子さんのお母さんや私の母、その他多くの方々が帰国を前にして亡くなったことは悲痛の極みである。

帰国後、村長さんは各支部の方々と連絡を密にされ、昭和四十七年第一回弥栄会開催。そして聖蹟桜ヶ丘に村長さんの達筆な弥栄村の墓碑が建立された。以来、毎年総会を続け、本年度第二十四回で百人以上の参加者があり、先輩の偉業を称え、その精神を継承し、慰霊法要の行事を続けている。滋子さんは副会長として、ご尽力くださっている。

(弥栄会会長 藤巻 禧四郎)

終戦前後の追想

新潟県 金内 義亨

日本人のだけれども初めて体験した敗戦による終戦、時が止まったかと思うような恐怖の日夜を、満州国の奉天市で迎えた自分の姿を半世紀を経て、当時の記憶も時と共に薄れ定かでない点多々あると思いますが、まさか敗戦などとは夢想だにできなかったことで、敗戦前後の外地での強い者勝ちの世界で、いかに生き延びてきたかを、八十歳を迎え文字からも遠ざかりつつある現在、事実を語り残すべくペンを取りました。

常日ごろどんなに強がりをお口にしても、自分が今殺される、死ぬという場面に遭遇したとき、いかに対応するかによって生か死かが決まるとは想像できないと思います。目をあけていても何一つ見えず、また息をしても言葉にならず、喚くといった有様でした。しかしこれも度重なるにつれて、度胸ができてか

平常になりました。

私は当時、鐘紡の姉妹会社徳和紡に勤務しておりました。

昭和十九年六月、奉天が初めて空爆を受けました。

B29数機が駅前の中央郵便局あたりの路上に爆弾を数個投下し、相当大きな穴があけられましたがお昼どきだったので通行人もなく、人的被害はなかった。

目標は奉天造兵所のようにしたが、造兵所もたいした被害はなかったようです。このころより私も敗戦などということは思ってもいなかったが、戦争が人事ではなく身近におぼえるようになったことには、まぢがいりませんでした。空爆以来その筋からの通達で、防空壕を作るよう、指示がありました。

昭和十九年九月に入り、いまだ残暑厳しい秋晴れのお昼ごろ、空襲警報のサイレンが鳴り出したので、驚いて事務所前にとび出し空を見上げると、市の上空を南から北へと、B29が銀翼を光らせながら悠々と飛んでいるではありませんか。数えてみると九機の編隊でした。友軍機は見当たらず、ハラハラして眺めている

と、市の上空を一周半ぐらいたったところになって、キラ光るものがあるのでよく見ると、日本の戦闘機がB29に体当たりをしてみました。まるでタカにスズメがおそいかかっているようなものでした。皆がかたずをのんで見守る中、最初の一機が体当たりをされて空中分解し、二機目は体当たりされて黒煙をはいてキリモミ状態となり地上に落ち、私どものところまで爆発音が聞こえました。三機目は渾河こんが近くに墜落し、生き残った兵が一人捕虜になったことを後で知りました。このころより日本本土の爆撃や南方での不利のニュースも入るようになり、戦争もますます身近におぼえるようになりました。

過去二回の空爆を受けた奉天では、疎開の話題も出るようになり、その筋の話では疎開先は通化方面とのことでしたが、私どもは家族を疎開させて、単身で工場の操業ということも不自然であり、また未知の辺りな通化辺りでは、これから冬に向かっているの生活を考えると、だれも踏み切れませんでした。私どもも五八一部隊の傘下にあり、勝手な行動は許可されないのは必

定です。

昭和二十年に入ってから、私の知る範囲でも数人の応召者があり、私どもも近いのではないかなどと話題になりはじめました。幸いにも私どもは五八一部隊の傘下にあるので、最後のどたん場まで、最少限の人員は残されるものと思っておりました。また年明けと共に関東軍が南方作戦参加のためとかで移動を始めており、これを目の当たりにし異様な気分になりました。

また満人従業員の間にも、外部から私どもの知らない情報が入っているものと思われて、今までと違った雰囲気となってきたように感じました。

私の助手をしている劉という人物は、私より二、三歳上の満人はなれた顔立ちで、主として工員の工資と満商人関係を担当していました。いろいろ配慮して行動してくれており、私どもと満人とのクサビ的な存在でした。一度も口外したことはありませんが、外からの情報もいろいろと入っているものと思われました。何よりも工資の支払いと満人商店への支払いに重点を置いていたのも、その行動の一端と思われました。そ

のせいか工場でのめ事は一切なく、今までと変わったことは何一つ起こりませんでした。また時局柄、食糧難に備えて万難を排して食糧の確保にあたらせ、取りあえずの目安として、日系三十人、満系百人の六カ月分を貯蓄目標として実行したことも、工員に安心感を与えたことになりました。

八月十日部隊より七月までの納入代金を、十九万円支払うから十八日に取りにくるよう連絡がありました。これが入れば諸支払いの心配もなく、受領に家印を初めて会社の集金に使うよう予定しておりました。ところが劉君がこの金を満商に先付けて支払ってくれぬかとのことで、何かあると思い承知しました。この先付け小切手がソ連軍の侵入で銀行が押さえられ不渡りとなり、今ではわが家の宝となりました。

ソ連軍が日ソ不可侵条約を破って国境を突破したのは九日とか後で知りましたが、奉天辺りはこれといった変動は見られず、近隣の工場も変わった様子も見受けられず、私どもも普通の操業をしておりましたが、これから先どうなるのだろうかという不安感はだれもが

抱いておりました。

二回の爆撃を身近に体験し、今度はソ連軍の参戦となると陸続きのため不安が倍加し、疎開の話題も持ち上がりました。猪口君は妻子がいるため、疎開を口にするようになったので致し方なく、十三日昼どき食堂に皆さんが集まってもらい、疎開希望者の申し出を聞いて処置するつもりでした。疎開先その他をその筋と折衝し、切符の手配もしなくてはならないと思いましたが、私は結婚して間もないので、家内を疎開させる気はありませんでした。皆さんの疎開についていろいろ思いながら食事をしていると、臨時ニュースで明八月十五日正午重大放送があるから聞くようにと放送があり、日系従業員並びに家族に、明日正午神社前に集まるよう手配しました。

十五日十一時半ごろより全員が神社前に集まり、猪口君のラジオを窓ぎわに出してもらい今か今かと待ちわびました。正午、陛下のお言葉が流れ、日本人のだけれども夢想だにしていなかった敗戦による終戦のお言葉に皆、気ぬけた状態となりました。午後からは工

場の運転を止め、これからの善後策を考えねばと皆と相談し、取りあえず工場での動揺を押さえることに重点を置き、劉君に相談するのが最善の策と考えました。劉君も同意見のようでしたので、取りあえず十五日までの工賃を十六日に支払うことを皆に伝えてもらい、支払いの準備を依頼し、私は銀行に出向き準備万端をすませて、支払いの一切を劉君に一任しました。

十六日十時過ぎ、中国政府からの通達ということで、鉄西工業会から電話連絡があり、十九日正午までに工場の実態調査と棚卸表を提出するように、提出しないときは厳罰に処すということなので、急ぎ準備に入りました。今までのように満人を使うわけにいかないのので、日系のみで一晩徹夜で頑張り、どうにか正午まで工業会に持参することができました。

工場の運転を止めたので、仕掛品を放置しておくこともできず、十六日早朝より日系社員のみにてボイラーを焚き、仕掛品を処理すべく工場を運転したところ、近所の会社から煙が出ていると苦情があり、急ぎ乾燥のみで処置し運転を中止しました。ところが工業会に

報告した数に仕掛品が含まれていなかったので、五百反の食い違いが生じ、報告の訂正をと思いましたが、後日発覚のときは、自分で責任を取ろうと覚悟を決め、届けませんでした。これを換金して今後の生活費に当てれば、当分生活にも困ることもないと思いました。

終戦当時は一反二千円で取引されていたので、安くとも百万円ぐらいになると思いました。この資金を内地に運んでおいて、皆の帰国後の資金にすることなども考えました。当時軍関係の逃亡者で、五、六万円で内地にとんでくれる者もいると聞いていました。

八月二十日、工場で各自に持ち場の点検が終わり次第、事務所に集まるように指示し、私どもは守衛所前に椅子を持ち出し、周囲のどよめきに注意しておりましたが、昼過ぎよりどよめきが歓声に変わり始めました。二十日の正午をもって日本軍の武装解除が行われたとのことでした。工員の動揺は見られず、皆は宿舍におり、時々食堂に集まって、四周のどよめきを気にしながら過ごしていたようでした。歓声も夕方になるにつれ、ますますひどくなり、北側の大喚声は満蒙毛

織らしく、このようなときは、何よりも夜間がねられると承知しており、私どももいつねられるかと戦兢兢として、夜明けを待つよりほかはありませんでした。時間の問題だと思いつながら夜警の皆に後をお願ひして、一足先に帰宅し仮眠することにしました。

六時過ぎ、社員の一人があわてて呼びにきたので家を一步出てみると、歓声をあげ暴徒が集まり始めたところでした。我が社に向けて次々と集まり、七時ごろには駅に通じる大通りに暴徒は黒山のように集まり、歓声を上げて突入の折をねらっているようでした。

九時過ぎ、彼らは倉庫に向かって突進し、入口の鉄扉をなんなく破り中になだれ込みました。私どもは家族を向かいの金鉱精錬所に行かせ、お願いして工場に引き返し、様子を見ながら反物の奪い合いにむしろ手を貸してやる始末でした。彼らは私に危害を加えるより、品物を取るのが目的なので、夕方の四時ごろまで次々と略奪が続き、皆が引き揚げたあとを見て回りましたが、奪い合いの折、圧死したと思われる死体が三体あり、いかに物すごかったかが推察できました。

倉庫内の梱包用のムシロをのけて見ましたが、一反も残っておりませんでした。工場のぬれた布地まで跡形もなく持ち去られました。社宅は畳の表まで切り取ってありました。私は念のためと思い満人宿舎に行つて見ましたが、宿舎は暴徒前と変わりなく、工員たちも朝から傍観していたとのことでした。主だった者は食堂に集まっていたので、無事を喜ぶとともに、君たちも反物を持ち帰ればよいのにと言うと、苦笑いをしておりました。これもみな指示通りに行動していたのではと、私には思えてなりません。いずれにしても会社の工員が暴徒に参加していなかったことが、どんなにか嬉しく思われました。こうしたことも劉君の力添えが多分あったのではないかと思いました。精錬所の方からの助言もあり、西隣の満州皮革の宿舎に助力をお願いし、お世話をいただいたが、そこも危うくなり暴徒に追われながら、満州日立製作所に移り、助けてもらいました。周囲は皆日本人なので心強くもあり、皆、昨日からの疲れもあり、死んだように眠りました。

私どもは、いつまでもここに世話になっていることもできず、安全なところは大和区の日本人街にある浪速通りの営業所より他にはないと思つても、ここより四キロ以上もあり、女子供を連れて行く途中の危険を思つて思案にくれました。ところが折よく、日立を警備していた兵隊が原隊に帰らねばならず、翌二十三日に出發するのことで、事情を話して駅前通りまで同道させてくれるようお願いしたところ、地獄に仏といましようか、気持ちよく承知してもらいました。彼らも兵隊とは言え、武装解除されているので、一般人と変わりなく丸腰ですが、二十代の若者というだけでどんなにか心強く思いました。

八月二十三日十時過ぎ、朝食を簡単にすませ日立の方々に厚くお礼を言つて、若者たちについて宿舎をあとにしました。道路まで近道をと敷地内の草原を進むと、突然横手から発砲され、驚いて全員草むらに身を伏せて様子を見ていたが、次の発砲はなく、若者たちは自分たちを送ってくれたのだろうと笑つて出發するのことで、急いで道路に出ました。五、六分歩くと

自分らの工場でした。見るとレンガ塀は何カ所も無残に打ち破られており、その向こうに見える社宅の窓という窓は一枚もありませんでした。いかにものすごかったかが想像されました。鉄道のガードをくぐれば大和区ですから、途中事故のないことを祈りながら、若者から離れないようにと頑張ったお陰で、何事もなくガードをくぐることができました。

奉天省法庫県十間房方面に向かう若者たちに厚くお礼を言ってお別れしましたが、皆元気で帰国されたことと思えます。

私どもは駅前から浪速通りの営業所に入りました。私だけでなく、皆も今までの緊張していた糸が切れ、疲れがでてその場に座り込みました。営業所には留守番の社員夫婦だけと思っていたら、家が広く物騒なので社外の者、二家族六人が入居していました。勝手が違ったので猪口君と相談して、紅梅町の社宅にあす早々出向き善処することにし、その夜は皆も疲れているので、雑魚寝することにして、女性にも早速夕食の支度をしてもらいました。二十四日朝早々に猪口、木村君

と紅梅町の社宅に出向きました。通りに面した一棟二戸と裏手に一戸あり、裏手には事務長の老母がおられ、今まで一人で不安な毎日だったが、今日から同じ会社の者が住むことになり、大変喜んでおられました。早速、浪速通りに引き返し皆に実情を話し、二戸の空き家で雑居生活を送ることになるが、時がただけにむしろ安心なので、夕方までに移ることにしました。

八月二十五日、共同生活に入り各自の所持金を全部出してもらいました。所持金の一切は私まで届けてもらい、今後は勝手に処分を禁じました。人間はひもじくなると着ている物まで売って、食うことに走るものだそうで、これを破った者は共同生活から出てもらうよう、皆に申し渡しました。事務所の留守番の下川氏には、これ以上外部の者を入れぬようお願いし、いっこちらに移らねばならなくなるかもしれないので、取りあえず一番広い事務所兼応接間を私どもの居室として置くことにしました。無一文で社宅を出た私どもです。早速猪口、木村君と食糧さがしに鉄西地区に出向き、知人を頼りにそれでもリヤカー一台に積める

だけ恵んでもらい、三人で引っぱり、途中危ういことも二度ほどありましたが、どうにか紅梅町まで帰りました。また佐藤君が道路一本隔てた弥生町におり、私と違って町の生活にも慣れているので、いろいろと世話を願うには心強いと安心しました。

須藤四人、若松三人、会田四人、黒田三人、小関二人、山川三人、坂野四人、猪口三人、金内三人、單身男二人、女三人、食事も三十余人となると並大抵ではなく、朝夕はとりあえず一食一杯とし、白米に高粱を少し混ぜるなどして、少しでも食いつなぎました。暴動で逃げた私どもに持ち金はなく、また金があっても、品物が入手できないこともあり、どうして食いつながか一番の悩みでした。社宅は一戸八・六・三に台所、玄関といったものに、十五人余りが雑魚寝でしたが、苦情を言う者もおりませんでした。食事は家内が先頭になり、女子事務員を使い頑張ってくれました。時には鼻歌を歌いながら支度をしていた姿を追想させられます。

八月末に宿舎に二人の青年が訪ねてきました。本社

の常務の指令で、鉄西工場の援助のため派遣された太田、坂田の二人でした、身寄りもなく危険な奉天より、本社のある安全な瓦房店がぼうてんに全員引き揚げるようにとの伝言で、その費用にと二人は巻脚絆の下に百円札を巻き込んで、片足五千円二人で二万円を届けてくれました。私は三十余人をかかえて、これから先どうして生活していくか、まだ考える余裕もなく、仏のような常務の言葉に従い、この際瓦房店にお世話になることにしました。皆の意向を聞いたところ、清水君は奥さんの身内と行動を共にすることでした。別れて一度の連絡もなかったが、無事帰国されたものと思います。私は瓦房店に知人もなく、また一人ぐらいは工場の結末を見届けねばと思いましたが、また結婚したばかりでもあり、家内の母や兄が新京にいますので、安否を確かめねばならず、長年いた奉天市内に残ることが有利と思いました。

九月四日、瓦房店に皆を送って戻ってきた猪口君と、木村君も中旬には列車がいつ止まるかしれぬ情勢に、急いで瓦房店に旅立ちました。私はだれもいなくなっ

た紅梅町より浪速通りの営業所に、応召から帰った岡田君と家内を連れて移りました。しかし敗戦国民の私どもは、今までと違って大きな顔をして町を歩くこともできず、家で退屈な毎日を通ぐすよりほかはありませんでした。思い切って街の様子でもと思い、日本人の多く住んでいる大広場から古町辺りをぶらついて見ることにしました。町は案外に平穩で別に私どもに危害を加えることはなく、ただ北から流れ込んでくる同胞のかわいいような姿が目を引くだけでした。

ある日、広場近くを歩いていると、昔、康徳染色にいたころ、満糸の染料薬品商に勤めていた候という満人に呼び止められ、久々の出会いなので家に寄っていただきました。この候君に私どもが最後の最後まで、いろいろお世話になろうとは予想だにしませんでした。彼は自分の店を持って頑張っているらしく、それ以来折をみては訪ねてきてくれました。時には台所の米びつを見て、米を補給してくれたり、日本人に必要な味噌、しょう油まで補給してくれるといった心遣いをしてくれました。お陰で私どもは食に不足なく過ごすこ

とができました。候君は物も持ってきてくれて、帰る折は必ず私どもの家庭で使っていない捨てるような物を持って帰るので、もっと金目の役立つ物を持って帰るよう頼むと、金にしようと思って帰るのでなく、日本人に物を与えると、親日派としてにらまれるので、物々交換をしていることにしているのだと笑っていました。

十月の末でした。どこからどのようにして調べたのか、ソ連軍の司令部に出頭せよと呼び出されました。大広場の東拓ビルに出頭すると、徳和紡鉄西工場を接収し、解体の上十一月末までに国境を越さねばならないので、現場指揮者の指示に従い解体に協力するように、その間生命は保証すること、危険な鉄西への送り迎えは軍のジープでしてくれました。

指揮者は大尉で、欧州方面からきたとのことで、将校三人と兵四、五人で終戦時に侵入した兵と違ってまことに紳士的でした。使役には人員を集めて期日まで完了するように言われましたが、ほかの者は瓦房店に疎開しており、といって人を雇うには金はなし、満人

宿舎の者も昔と違って雇うことはできず、それでも二人協力してくれました。せめて十人ぐらい何とかせねばと途方に暮れていたら、佐藤君が飯さえ食わせてやれるなら十人ぐらい集められるとのことで、早速お願いしました。彼らは行くあてのない脱走兵で、工場の窓もない宿舎で寝ることにして、協力してくれました。工賃としては一銭も支給せず、仕事が終わると隣の煙草会社に連れて行き、適当に煙草を持たせました。彼らにすれば工賃の代わりだったかもしれない。

あるとき、兵隊が破れた皮のトランクを修理しているので、町に行つて良い物を持ってきたらと言いますと、身分不相応な物を持っていると、帰国のとき没収されるから無駄だと笑っておりました。大尉は専門家らしく染色のことは良く知っておられました。時々、私どもには手に入れることのできない食料などを持ってきてくれました。家内がいろいろお世話になったので、奥様にと女物の服地を差し上げたら、ソ連ではそういうことは禁じられていてと断られました。日本の風習だからぜひもらつてくれるようお願いしたとこ

ろ、司令部に伺い二、三日して許可が出たので、ありがたくちょうだいすると言つて受け取ってもらいました。

昭和二十一年正月早々、候君がおめでとうと顔を出すなり、「この建物に武器が隠匿してあると、八路軍にマークされているという情報がある。できれば早急に移るか、さもなければ武器をさがして軍に届けるように」と忠告がありました。

当時、国府軍と入れ替わつたばかりの八路軍の支配下で、町でも供出をふれ回っており、軍が発見した場合は隠匿とみなして銃殺に処すというふれが回っておりました。私どもは不安になり、同居の星野氏と相談し念のため各室を捜しましたが武器はなく、一応安心しましたが念のため、屋根裏と床下を確かめることにし、屋根裏を捜してみると、防寒のために天張りの上においてあるオガクズの中から、大型・普通の拳銃・銃弾二百発が見つかりました。予想外の物が出てきたので不安になり、急いで床下を点検すると、日本刀が十四本も出てきました。これをその筋に引き渡すまで

の保管も危険なので、いかにすべきかを考えた末、ムシロに包んで床下の土間に置き、その上に野菜などを乗せカモフラージュすることにしました。

候君からの連絡で武器を平安ピルの本部まで持って行くようにとのことでしたが、武器の運搬をどうするか、いろいろ考えた末、リヤカーに乗せその上に満人も関心を持たないようなものを乗せ、日本人の引越越しのように見せかけ、人通りの多い道を行くことにしました。平安広場までは二キロほどあり、木村君が前になり、岡田君が後押し、私が横につき、途中心配したこともなく、着いたときは足の震えが止まりませんでした。本部では候君が話を通してくれたので、何の嫌疑も受けることなく品物を引き取ってくれました。

終戦の年も知らぬ間にあけて、満州は酷寒、昭和二十一年二月の初めでした。昨年九月中旬、奉天を切り上げて瓦房店に行った木村君が、たとえ殺されても何も言えぬ時代に、一人で戻ってきたのには驚きました。このころは日本は存在しないなどと流言が飛び、

ソ連軍・中国・八路軍と入り乱れての支配下にあり、通貨も日本・朝鮮・満州に軍票を入れると十指に余る通貨が流通しており、私どもも折にふれ、どの通貨が安全かなどと話しておりました。

木村君の話では「瓦房店の本社工場も今八路軍の支配下にあり、染色部門は猪口氏が責任者となり、鉄西からの女子供まで働ける者は皆働いて食いつないでいる。猪口氏と八路軍の将校が大連まで染料を物色に出向いたが入手できず、猪口氏が奉天からきたということだから、奉天なら入手できるのではと軍に言われ、自分をお願いにきた」とのことでした。皆を助けると思ってたんとかしてもらえないだろうかとのことでしたが、奉天も終戦後は日用雑貨すら満足に手に入らないのに、染料などどこで商いされているやも分からず、また品物があっても標同然の私どもでは相手にされず、とうてい見込みのない現実でした。

ところが幸いにも候君が染料の専門家だったので、来宅の折にこの話をしたら、「この動乱の最中では金を払っても入手できないだろう。たとえ品物が有って

もそれを動かすことを忘れてるときだから、見込みはないと思う」とのことでした。私としては鉄西からの同僚、女子供にひもじい思いをさせないためにも、なんとか染料を届けて仕事を続けさせたいと思い、無理を承知で候君に手持ちがあつたら少しでもよいから貸してくれないかと頼んでみました。

四、五日して立ち寄つた候君が友達に相談したらその友達が、私のもと鐘紡康徳染色にいたのだから苛性ソーダが手に入るだろう。それと物々交換なら染料を出してもよいとのことでした。どのようにして調べたものか、よく調べてあり恐ろしくなりました。早速、物騒な鉄西に向き事情を話して苛性ソーダをお願いしたところ、所長の承認があればソ連軍に話してみることでした。康徳染色は暴動が始まる前にソ連軍が入っていたため助かつており、この次第をソーダ関係の満人が承知しているのには驚きました。

新京はさすがに首都だけあり、奉天よりは治安も良く、鐘紡の社宅は南新京近くにあり、薄暗くなるころ社宅に着き、義兄に家内の無事を知らせ、来新の目的

を話し所長宅に早速お伺いして、苛性ソーダ二十五本の許可をもらい義母、兄と一夜を過ごし、翌朝一番列車で帰途に着きました。家内の昔の友人を二人連れて帰ることになりましたが、奉天に着いたのが七時過ぎで、当時、夜間の外出禁止は夕六時から朝七時までとされており、駅を出ることができません。

しかし寒さもさることながら夜の暴徒の危険を思うと、目と鼻の先にある弥生町の家に意を決めて帰るべく町に出ました。二百メートルぐらい進むと前方の暗がりから、わめき声と共に銃弾が足もとめがけ飛んできました。私は暗がりの中に二人の女性を隠し立ち止まりましたが、恐怖のため目をあけていても相手が見え、何か言っているのですが言葉にならず、ただわめいているのが分かるだけでした。少し落ち着いてきて月明かりで相手をよく見ると、正規の兵隊でした。今ごろどこに行くのかと尋問されたので、家がすぐ先なので何とか通してもらえないかと頼むと、長らしい兵が早く行くようにと許可してくれました。今思うとあのとき三人が暗がりには隠れていたら、先方もメッタ

撃ちに撃っており、恐らく三人ともこの世にいなかったと思います。死を前にしていかにかに決断するかは、自分ということを考えたらできないと思いました。このときの女性お二人も、現在浦和市で余生をお元気で送っておいでになります。

鐘紡康徳染色は鉄西工業区にあり、奉天駅の真裏二キロぐらいのところにあり、鐘紡が初めて満州国に企業進出した工場で、この工場に救われようとは、夢のようでした。ソ連軍が奉天に侵入するや管理下に置いたために暴民が手を出せず、またソ連軍は設備が主眼で消耗品は余り問題にしておらず、苛性ソーダも在庫の三分の一ほどで、会社の責任者の許可とあってか容易に承知してくれました。

私どもは候君が手配した五台の馬車に五本ずつ積み、候君の商談先の指定のところに運搬しました。ところが二、三日して候君が、苛性ソーダの持ち込み先に八路軍が駐屯することになったので、急いで持ち出さねばならない、一緒にきて軍に交渉してくれと飛び込んできました。木村、岡田の両君を連れて先方と交渉し

たが、持ち出しを拒否された困ったことになったと思いました。やがて多少日本語の分かる将校がきたので、八路軍の依頼で染料と交換の次第を話し三拜九拝したところ、皆と相談するということになり、ホッとして許可を待ちましたが、その時間の長く思えたことは忘れられません。しばらく待たされ先程の将校が毛筆と半紙を持ってきて、持ち出しを許可するから後日のためにと、私に住所氏名を書くように言い、私はここで頑張らねばと思ひ度胸を決め、住所は鉄西の康徳染色とし、氏名は瓦房店にいる猪口君の名を考えることなぐ書きました。

あとで追想するにあの折、ちょっとでも考え込み、ためらっていたら許可にならなかったのではと思ひました。馬車五台を連らね無事に浪速通りの事務所に着いたときは、朝からの緊張がゆるみ、立っているのがやっとでした。取りあえず事務所の塀の内側に置き、候君の処分を待ちました。私は目的が瓦房店に届ける染料との交換なので、二人で運べる量を用意してもらい、余分があったら生活費にと思ひました。

身重の家内を佐藤夫婦にお願ひして、私と木村君は四月二日、染料を持って瓦房店に向かいました。八時間ぐらいかかって午後四時近くにどうやら着きました。染料は猪口君を通じ八路軍に渡し、重荷を下ろして猪口君の社宅に入りました。これで大任が終わったので、鉄西から避難した皆にも多少役立ったものと、自己満足した気分になり、四、五日皆の近況を見届けて引き返すつもりでおりました。

翌日鉄道が止まり、四、五日もすれば復旧するものと思っておりましたが、八路軍と中央軍との戦闘の一端とは知りませんでした。

二、三日して猪口君が軍から染料代金をもらってきたと、七万円近い代金を渡してくれました。さすが正規軍だと思いました。取りあえず六万円を持ち帰るべく、風呂場の天井に隠し、持ち帰る方法を考えることにしました。

五月下旬になっても鉄道の開通の話題もなく、三百キロを歩かねばと思ひ、遅くとも六月の初旬に出発しなければと思うようになりましたが、その折、どうし

て持ち帰るかが問題でした。敗戦直後、私どもの救援にきてくれた太田、坂田の両人は巻脚絆の下に巻き込んで列車の旅でしたが、私の場合は歩いての旅なので、体に着けたり衣服に縫い込んだりしても不可能にひとしいので、考え抜いた末、満人も見向きもしない、しかも必需品である地下足袋代用の草履を作ることを思いつき、あとは運を天に任せることにしました。

同居の方々の助力を得て、お年寄りの方に草履の作り方を教わりましたが、簡単なようではなかなか作れるものではありませんでした。婦人たちに丈夫な布で、袋紐を作ってもらい、芯に入れるお札の水ぬれを防ぐため、食用油を少々ぬり、二、三枚を丸めて芯にして草履を編むのですが、初めにできたものは足の倍もある幅、長さとなりました。片足で一万円ということ、芯の入れ方などを考え、四、五足目でどうにか思うようなものができたときは、天にも昇る心地がしました。出来上がったものをわらを打つように、札が破れぬ程度に叩いて仕上げるのに根気が必要でした。完成するのに十日ぐらいかかりました。

準備の万端が終わり、あとは何日に出発するか、終戦の動乱期に、しかも敗戦国民の私どもは、途中で殺されても文句は言えないときなので、三百キロの旅程はなかなか決断できるものではありませんでした。三百キロを十日から十五日ぐらひは必要ですが、この物騒なときだけに倍は予定せねばと思ひました。蓋平に行けば、そこから鞍山まで二、三度行ったことがあったので、案外と不安は覚えませんでした。途中は野宿が主になると思ひ、厚手の作業着、地下足袋に水筒、雑袋といった旅姿でした。道中の費用として、満州紙幣の一円札と十円札を五百円ほど準備し、分散して持ちました。雑袋には、三分分の握り飯六個とちり紙を入れ、会社から預かった実態調査書を万が一の場合を考え、二つに切つてちり紙同様にして持ちました。

六月十二日朝四時ごろ、私は蓋平方面に向かつて歩き出しました。蓋平まで三日もあればと安易な気持ちでした。三時間ほど歩いたところに十軒ほどの集落があり、何気なしに進んでいると異様な雰囲気を感じたので、急いでその場を離れました。こんな山奥にも敗

戦の波が押し寄せているのだから、部落に入らずに道がなくても鉄道を見失うことのないように注意して進み、多少の回り道になつても安全が第一だと思ひました。夕方になり昼飯を食わなかつたため腹がすいてきたが、前方に部落が見えたため一歩でも前進と思ひ歩きました。八時過ぎ、土堤の片すみの草むらを見つけ腰を下ろし、握り飯を食べながら寝ころんで星空をながめ、敗戦後の出来事を思ひ浮かべながら、いつのまにか寝入つてしまいました。寒さに目が覚めたので時計を見ると、三時過ぎでしたので夜の明けないうちに少しでもと思ひ、今日一日も無難で旅ができることを願つて歩き出しました。

その日、次の日と鉄路伝いに進み、草むらを見つけては横になりました。十五日昼ごろ部落に近づき、周囲に気配りながら村はずれの一軒家に近づいて見ると、老夫婦だけの住まいでしたので安心して立ち寄り、一円札を三枚ほど出して食い物と水を分けてくれるよう頼むと、私の片言の満語で日本人と知り、快く高粱めしと黒い漬物を分けてくれました。金を渡すといらな

いと言うので、無理矢理渡して飲み水を水筒に入れてもらい、外に出ると家の前に日用の野菜を作っており、ナスがきれいに色付いているのを見てみると、老母が出てきて、うまいから食べてみれと二、三個取ってくれました。空腹も手伝ってかこのときの味が今も忘れられず、季節になると生ナスを口にするのがありません。この老夫婦は日本が戦争に負けたなど関係なく、変わったところありませんでした。また晩は野宿かと思うと情けなくなりましたが、これもまた私の人生のよい思い出になったと思います。

十六日鉄道沿いの畑に腰を下ろし、昨日もらった高粱めしを食っていると、旅芝居の一座が近づいてきました。座長らしい者が、片言の日本語でどこに行くのかとたずねるので、瓦房店から奉天に帰る途中だと答えると、今は奉天まで行けないし、瓦房店に戻った方がよいと言われたが、何としても蓋平まで行きたいという、しばらく考えておりました。座長の知るころでは、八路军と中央軍が争っており、蓋平から先は中央軍が頑張っている。鉄道も蓋平から大石橋の間で

一部爆破されており不通となっているようで、それでもなんとかも行きたい、何とか良い方法はないかと相談すると、しばらく皆と話し合った末、自分を信用するなら蓋平までなら送ってやると言ってくれました。馬車に揺られながら、座員に情報を聞いているうちに、うたた寝をしてみました。

宿に着き、ランプの下で満式夕食を終え、横になり敗戦後のことを話していると、宿改めらしい兵が四、五人入ってきたので、もう駄目かとあきらめていましたが、座長が私に布団をかぶせて寄りかかり何食わぬ様子で兵隊と応待してくれたので、事なきを得ました。翌日、旅芝居の一座なので暴徒の心配もなく、初夏の満州の広野を初めて存分に満喫しながら、進みました。この一座は私にとっては幸運の女神とも言うべきでしょうか。

蓋平に入り駅前大通りでこの一座とお別れすることになり、座長が要らぬと言うのを私の気持ちだからと十円札を五枚お札に取っていただきました。駅に向かつて歩いていると兵隊に呼び止められました。「お前は

日本人ではないか、何をしているのか」「今、瓦房店からきて、これから奉天に行く途中だ」「今は危ないから、行ってはならない」兵隊は私を警察署に連れて行き、簡単な身体検査をして持ち物を取り上げず、留置場に入るように言われました。留置場に入れられたまま何の取り調べもなく、三日間過ぎました。

二十一日、留置場を出るように言われ、大石橋方面は危ないから駄目だが、ほかは心配ないからどこでも行ってよいとのことでした。あとで思うに、行っては駄目だと止めてもいくだろうから、留置場に止め置かれたのでした。

街はずれに來たら私を呼ぶ者がいました。軍服を來ているのでなかなか思ひ出せませんでした。昔、海城で知り合った黄君でした。こんなところで何をしているのかと聞かれ、今までのいきさつを話すと、どうしても奉天に行くのなら、八路軍の海城方面攻撃があるから明日使役に参加しないか。参加するなら上司に許可をもらってやる。そうすれば海城までは心配なく行けるといっているので、是非お願いしてくれるよう頼みま

した。

許可をもらって、指定された場所で待っていると黄君が弾薬箱を持ってきた。恐らく箱の中は弾薬でなく、捨てられても良いように雑品が入れてあったものと思います。黄君は私の処置を見抜いていて、取り計ってくれたものと思います。国は違っても持つべきものは友と思いました。

四時過ぎ指令が出て前進に移りました。中国軍側はこの盆地をはさんで対峙していたが、多少の抵抗があっただけで、中共軍に押しまわれ大石橋、他山、海城と事前に撤退したのか、抵抗らしいこともなく海城大橋まできたので、箱を捨てて市街に逃げ込みました。

駅前の康徳社員の高松さんの所に逃げ込みかくまってもらいました。高松さんのご配慮で汽車の方も満人の知人にお願ひし、手配してもらい、二十六日の奉天行きに乗ることに決まり、一人旅は危険なので満人の方のお供をさせてもらうことになり、道中何事もなく奉天に着きました。駅頭に降り立ったとき、初めて好運にも生還できたと、涙が出るくらいでした。

家内をお願いしていた佐藤君は、私を見つけ、家内が「帰った、帰った」と小踊りして喜びました。家内は早速私の持ち帰った草履のほどこきにかかりました。防水のため油を着けてあるため、臭くて大変のようでした。片足一万円の草履、私の考えに考えた末の作品で、満人も関心も持たず、まさかこれに金が隠してあるうとは想像もしなかったことでした。

一日中、家にも出て外出もできないようでは退屈なので、多少危ないことがあっても仕方ないと思い、折をみては町に出て動きを見聞しておりました。私の瓦房店滞在中の五月の初めごろより、民会が会報を町のとどこころにはっていたらしく、引揚げも間近で大連經由でなくコロ島經由のことでした。引揚げも難民を優先に、終わり次第、奉天の居住民にするとのことでした。私の瓦房店からの帰りが六月末だったので、難民の引揚げは大体終わり、町にあまり見かけなくなっておりました。

七月いよいよ私どもの番なのか、町のあちらこちらで日本人が物を売っている姿が見うけられました。瓦

房店から持ち帰った六万円をいかに処置すべきか、考えておりました。七月十日家内の出産も大過なく終わりました。この動乱の最中に、幸運にも隣家の奥さん（福村義江さん）が産婆さんだったことで、十三日でしたか、私どもの引揚げ割当て通知がきました。

昭和二十一年七月二十日に奉天駅よりコロ島經由と決まり、佐藤君一家はこれに参加し、私どもは家内の産後のことを考えて、二十一日目に参加することになりました。折にふれ候君が立ち寄ってくれるのが、何より心強く思われました。私は会社支給の夏冬の礼服を、新京に疎開してあったので助かり、着て帰ろうと思いましたができないので、候君に私の思い出として差し上げました。彼には初めから引揚げ出発の日まで、お世話になろうとは思いませんでした。本当に良い知人を持ったと思いました。帰国の折、候君の住所氏名をと思いましたが、途中で官憲に発見されたら候君に迷惑が及ぶと思い、一切を忘れることにしました。現在のような時代になると、是非一度会ってお礼ができたらと思っております。

【執筆者の横顔】

金内義亨さんは、大正四年生まれで今年八十一歳になられます。新潟県の村松中学校を昭和七年に卒業しましたが、不況のため就職もなかなかなく、昭和八年の春に鐘紡淀川支店に採用され入社しました。

鐘紡が満州に進出することになり、奉天市の鉄西に染色工場を建設するため、金内さんも転動することになり、昭和十年四月に赴任しました。十八年に徳和紡に転職、二十年七月に結婚しましたが、それからわずか四十日後に敗戦となりました。

八月十五日を境に、様相が一変し、工場、社宅まで暴民に略奪破壊されましたが、生命、食べることは、ソ連軍の将校兵が金内さん宅に住んでいたため保証されておられ、北満の人々に比べると、悲惨なことにはならなかったようです。それに満人の友達にもいろいろと助けてもらったとのことでした。

二十一年六月ごろ、引揚げの話が聞かれるようになります、北からの避難民の引揚げが終わり次第ということ、九月末に、奥様と七月に産まれた長男を連れて、

壺^ウ蘆島より無事に佐世保に帰ってこられました。

新潟に帰ったものの、年老いた両親を置いて、離れた土地に就職もできず、地元の町工場に就職、それから約四十年間、七十歳まで勤められました。

その間、長年自治会長をつとめられ、またいろいろの役職も受け、活躍されておりましたが、八十歳をもって、引退されました。

それからは、庭木いじりや、盆栽いじりに精を出されておられます。三人のお子さんたちも、皆、立派に成長されました。

金内さんも奥様も、健康に恵まれ、毎日を元気に過ごされておられます。

(新潟県引揚者連盟本部)

副本部長 坂井 美代江